

男性（30代）禁煙年齢30代

「松浦さん、俺もたばこを吸いたいな」

片手にたばこを持ち、必死に筆を走らせる私に健太はこう言った。

健太の一言で私の手が一瞬止まった。「何を言うてるんや、お前は！」そのとき私は、このくそ忙しい時にあほなことを言いやがってとばかりに一喝した。

ここは警察署内にある取調室の一室である。私は当時少年事件担当の刑事で、ひたたくり事件で管内を荒らし回った暴走族少年達を署をあげて捜査し、芋づる式に逮捕したのだ。健太はその不良グループの最後の少年。まだあどけなさの残る16歳の子供であった。

本件に関して言うと少年事件では異例の10日間の警察勾留が出された比較的大きな事件であり、少年も長期間留置場の中での生活とあって、取調官である私になつてきた。

勾留7日目。私は目の前に迫る送致に間に合わせなければならない調書を作成するのに必死であり、健太の話をゆっくり聞いてやるような余裕はなかった。

にやにやと私の反応を見て楽しんでいるかのような健太を尻目に、再び筆を走らせた。

その夜のことである。ベットの中で1日の出来事を振り返っていると、どうも頭に何か引っかかる。よく思い出してみると、それは健太とのたばこを通してのやりとりのシーンである。「もし、自分がたばこを吸いたいと思って吸えないときに、目の前で無神経に吸われたらどんな気分になるだろうか？」「犯人と刑事でも同じ人間やんな」と思うといたたまれない気分になった。

頭の中を「後悔」が走り回る。「相手の気持ちを理解できないなんて」頭がさえて眠れない。どうしようかと考えた。「よし、とりあえず健太に謝ろう」そして健太とある約束をすることを誓ったのだ。

次の日、取調べのため、留置場から出た健太はいつものようににやにやしなから私に話しかけてきた。留置場生活をする人間にとって、狭い塀の中から出られた時が最もうれしいときなのである。

そして私は健太にこう言った。「健太、昨日は悪かったな」健太は何のことが

わからず、キョトンとしながら私を見た。「たばこを吸えないお前の前で、無神経に吸っていたのはほんまに悪いことをしたと思ったんや」健太の顔が真顔になった。

私が続けた。「でもな、もう少し辛抱してくれ。お前は来週から少年鑑別所へ行ってその後少年院へ行かなあかん。ちょうどええ機会や。どうや、この際たばこ止めへんか？」

健太は「何だそんなことか」とばかりに苦笑した。そんな言葉はこれまでいやと言うほどかけられてきたのだろう。そして更に私は付け加えた。「何もお前一人に止めろとは言わへん。俺も一緒に止めるわ！これでどうや？」

健太は一瞬真顔に戻ったが、次の瞬間大爆笑した。「そんなん無理や。絶対に無理。そんなこと言うて、一緒に止めてくれた大人なんかおらへんわ！」きつと本当のことだろう。

健太は次の日少年鑑別所へ送られた。「1年間少年院で頑張って、きっと松浦さんのもとへ帰ってくるから、待っててや！」健太は笑顔で巣立っていった。

その1ヶ月後の3月31日、私は警察手帳と手錠を置いた。失敗しても間違ってもやり直したいと思う子供、頑張りたいと思う子供達が頑張れる場所、そう新しい青少年健全育成として障害者福祉施設の中で作るためだ。

そして、もちろん健太との約束であるたばことライターも。

「健太、しっかり頑張って帰っておいで。そしてまた一緒に頑張ろうじゃないか！！」

これは実話である。私は15年間何度も禁煙に挑戦したが、1週間ともたなかった。しかし、今回は3つの条件を重ねたことで禁煙に成功した。まず、環境を変えることである。これまでの生活から全く新しい世界に飛び込もうとしたとき、何もかも初めての極度の緊張状態になる。要は刑事から全く新しい福祉の世界に入り、たばこを吸うことさえ忘れてしまうような環境に変わったこと。第2に、刑事という安定した職から福祉に変わり、収入が半分に減った。よって、これまでの生活を全て改めなければならなくなったこと。そして最後に健太少年との約束である。男と男の約束を守れないなら真の青少年健全育成を作ることはできないと自分に言い聞かせたこと。この3点が重なったことで私はたばこを止めることができた。今では自分がなぜあんなものを吸っていたのか不思議でならない。

「気分転換？」「食後の一服？」「精神を安定させる？」ただの中毒なだけだ

とわかった。今では吸っている人を見ると可哀想で仕方がない。なぜなら、高いお金を出してわざわざ体に悪いものを入れて喜んでいるからである。喫煙者の皆さんへ。1日も早く止めた方があなたのためですよ。